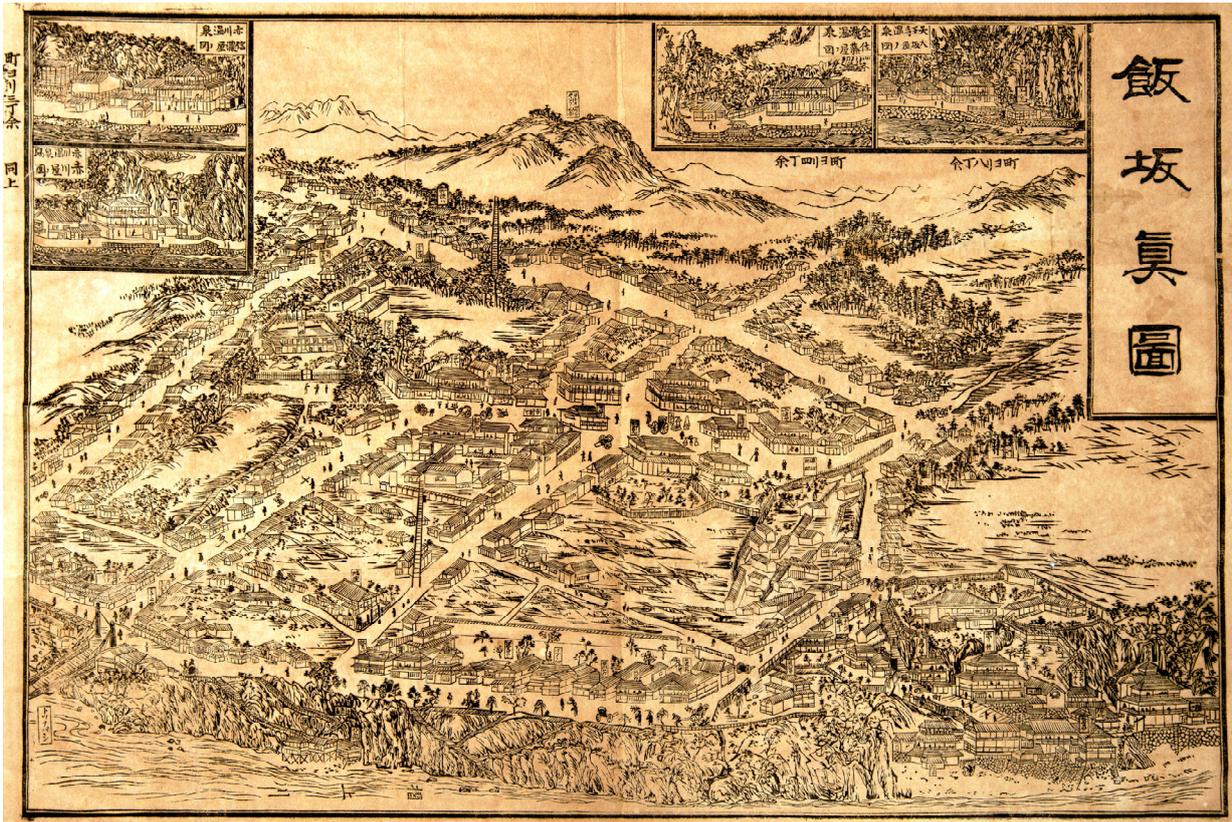


福島県史料情報

第42号 平成27年(2015)6月



飯坂真図 (齋藤文郎家文書 (その三) 141)

往昔を偲ばせる「飯坂真図」と南部精一の軌跡

明治期、全国で名所・旧跡・建築物などの全図が数多く描かれる中、明治二十八年(一八九五)頃の飯坂町全景を描いた「飯坂真図」(齋藤文郎家文書)も出版された。本図は、『飯坂温泉案内』(明治二十八年二月発行、香味才助著作・発行)の「飯坂真図」と一部を除き一致し、同書同図の補刻版とみられる。

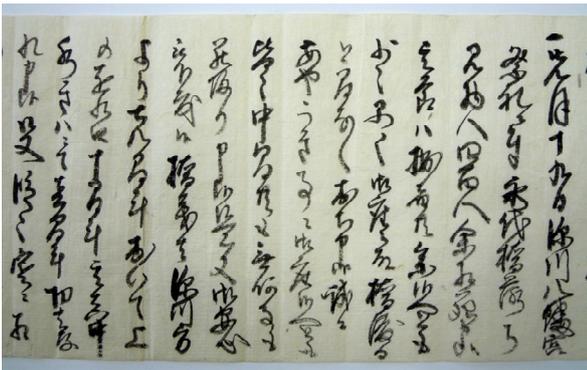
本図では、図下部の摺上川側に「波来湯」、図右下には「瀧の湯」の周辺に旅館が並ぶ瀧の町、図中央に「鯖湖湯」を中心とした湯澤地区、そして図上部の杵に天王寺温泉などの近辺の温泉もみられ、今はなき名旅館や今も残る老舗旅館とともに、温泉街の様相を捉えている。さらに、町役場・警察署・郵便局・学校などの公共機関の充実に加え、図下部の畑地が目立つ古戸地区などにも、道路整備によって人家が増え始めている上、摺上川沿いの若葉町の遊郭、芝居興行が催された旭座(明治二十六年新築、大正期に映画館)なども描かれ、飯坂の賑わいが窺える。

飯坂の往昔が偲ばれる描写が多い中、図右下の瀧の町の一角には、南部精一(一八三四—一九一三)が携わった「南部病院」が描かれている。南部は、飯坂出身で会津藩医となった人物で、近代西洋医学教育の父ポンペ(オランダ軍医)や、後に幕府の医学所頭取を務める松本順に師事し西洋医学を学んだ。明治維新後は、岩手県で県立岩手病院長に就任するなど各地を転々とし、明治末に飯坂で亡くなったが、その足取りは不明瞭な点が多い。しかし、『飯坂温泉四季之友』(明治二十二年一〇月出版、長澤廣吉著作)で飯坂の名医に南部の名が挙げられ、他の絵図にも南部病院が描かれることから、明治半ばには郷里飯坂で治療に尽力していたことが確認できる。本図でも南部精一の功績が反映され、特筆すべき場所として描かれたと思われる。

(小野孝太郎)

永代橋崩落の難を逃れた 上飯坂の甚九郎

文化四年(一八〇七)九月二十二日、江戸神田松下町三丁目不動新道(東京都千代田区内神田)に住んでいた甚九郎は、信夫郡上飯坂(福島市飯坂町)の草野栄助・同清三郎に宛てて飛脚便で近況を書き送った。甚九郎は、手紙の内容から上飯坂村出身の職人であったとみられる。草野氏は、白河藩保原代官所の支配下であった上飯坂村下組の組頭を務めていた家柄である。甚九郎の手紙は、実際に生死の瀬戸際に立っただけあって緊迫感がよく感じられ、その内容はおおよそ次の通りである。



文化4年(1807)9月22日付甚九郎書状
(部分、草野清五郎家文書(その1)25)

今年の江戸表は大変不景気である上に松前騒動のため大名・旗本屋敷では普請なども手控えられている。そのため様々な職人たちも仕事がなく、暇を弄ばしているような状況である。現在私は浅草鳥越(東京都台東区浅草橋)にある肥前国平戸藩主松浦熙様の上屋敷で働いている。

八月十九日の深川八幡宮(富岡八幡宮、東京都江東区富岡)祭礼の時に永代橋が崩れ落ち、見物人四百人余りが亡くなった。その際に私たちも参詣していたが、たまたま少し早かったので永代橋を渡って間もなく崩落し、難を逃れることができた。本当に間一髪危ういところだったが、一緒にいった仲間たちも無事なのでご安心下さい。永代橋は深川方より七八間程おいて上が折れ、十間程完全に崩落してしまつたのである。

永代橋は東京都中央区と江東区との間の隅田川に架かる橋で、元禄十一年(一六九八)に架けられ、享保四年(一七一九)の洪水で破損したため再建された。祭礼を見ようと群衆が殺到し、橋の老朽化もあって荷重に耐えかね、橋の一部が崩れ落ちたのであった。お祭りという庶民のささやかな楽しみの方が、一転して修羅場と化したのである。この事故では多数の溺死者・行方不明者を出し、橋梁事故としては未曾有の大惨事となつたのである。(渡邊智裕)

江戸時代の庶民の生涯費用

人生・将来の設計を考える際、お金は必ず付いて回る。生涯賃金や生活費などの試算は、暮らし方の参考として重要だが、江戸時代にも、一生に掛かるお金を試算していた。

「人間一生諸入用勘定」(庄司家文書)は、江戸時代後期の庶民(男子)の一生の生活費を記した史料である。本書は、江戸馬喰町三丁目吉田屋小吉が版元となり摺り出された同名の版本(全四丁)を筆写したもので(筆者不明)、吉田屋は、他にも同様の一枚物を摺り出していた。

本書には、子供の誕生後、掛かる費用として、産着二つ(金貳分)、木綿花染無垢(金壹分)といった赤子衣装の費用や、産婆謝礼(金壹分)などの出産費、七夜の祝(金貳朱)、宮参りの雑費(金壹分)のような儀礼費まで取り上げている。



人間一生諸入用勘定
(部分、庄司家文書I-1711)

その後も、節目ごとに、三才の髪置き(金壹貳式分)、五才の袴着(金三両)、一〇才の手習い入学(銭壹貫五〇〇文)、一五才の元服(金壹両)、結納(金貳両)などの儀礼・行事費が挙げられている。さらに、飯米などの食費や、下駄・着物などの被服費は、増減を加味しつつ世代ごとに算出している。

集計によると、六〇才までで金六七六両余(米換算で現価約四〇五〇万円)掛かるとあり、この総計から、酒を呑まない人は金約一五〇両(約九〇〇万円)、煙草を嫌う人は金一八両余(約一〇万円)を引く。加えて、一年ごとの隠居費用も記されており、それぞれの目標年齢に合わせて生涯費用が算出できる。

末尾には、人生とお金の大切さを詠んだ短歌「一文や二文をなにと思ふなよ阿弥だも金で光る世の中」かへ見れハおよハぬ事の多かりき笠きて暮らせ己が心に」など四首を付して、本書を手にした人々への教訓・戒戒の意を込めている。

最後に、本書の字体は浄写から程遠く、筆者の丁寧さは感じたい。しかし、版本の誤植を修正した箇所や、版本にない振り仮名を付した箇所などがみられ、筆者が「人間一生諸入用勘定」に関心をいだき筆写し、人生の歩み方の参考にしていた姿を垣間見ることができる。(小野孝太郎)

発掘調査と地籍図

平成元年から六年までの六年間、旧鹿島町と旧原町市に跨る海浜の丘陵部（現在は南相馬市）において、東北電力の原町火力発電所本体部地区の発掘調査が実施された。

調査によって明らかになったのは、調査区一帯に広がる古代製鉄遺跡群であり、検出された主な遺構数は、砂鉄を原料とする製鉄炉が一二三基、燃料を生産する木炭窯一四九基、堅穴住居跡一三三軒、掘立柱建物跡二九棟に上る。遺跡の規模及び遺構数からして日本でも有数の製鉄遺跡である。

その成果については大冊の報告書にまとめられたところであるが（原町火力発電所関連遺跡調査報告Ⅰ、Ⅵ）、その中で地形と遺構の關係に触れた考察がある。それによれば製鉄遺跡群は七世紀後半から九世紀末頃まで継続期間があるが、製鉄の始まりである七世紀後半の製鉄遺構は、沢地を開田した水田地帯を臨む丘陵突端部で確認され、製鉄開始当初は沢部の入り口で操業されていたことを知る事ができる。

このことを基に旧地形の復元を試み、地籍図を確認したところ、現在水田である沢部は明治期まで入江地形であったことが判明した。地籍図



地籍図(行方郡36金沢村全図、明治19年作成)から

では、入江が太平洋側から入り込み、部分的に製鉄遺跡の所在する丘陵内部までその痕跡を残している様子が見事に描き出されている。
七世紀段階の製鉄技術は当時の最先端技術であり、古代福島の前で行われた製鉄操業も西日本からの技術移植であることは、遺構の形態からも明らかである。その技術伝播が海路を利用したものであることは想像にやさしく、重量のある原料の運搬や、生産品である鉄の搬出にも遺跡近くまで入り込む浦が重要な役割を果たしたと考えられる。
また、最も海に近い東南端の遺跡の小字名には船沢という地名が残っており、入江の入り口において、船の出入りに関与した遺跡であったと想像される。(安田稔)

阿武隈川流域の調査

当館収蔵の県庁文書の中には、河川に関する簿冊が幾冊もあり、その中の一つに「阿武隈川流域河川調」がある。阿武隈川は、福島県西郷村の甲子旭岳に源を発し、宮城県までの約二四〇kmに及ぶ流路からなる一級河川である。

この報告書は、明治二六年（一八九三）八月に編纂された簿冊であるが、調査自体は前年の二五年に実施され、調査対象である本流・支流の三四ヶ所の河川名が記された表には、流域・流路・航路・本堤・控堤・欠止ヲ要スル沿岸の長・水害区域・灌漑反別が記載されている。また、宮城県域の河口部と白石川を含む阿武隈川本流と各支流が描かれた詳細な流域図も添付されている。なお、この一覽表の作成事由として「本表ノ河川ハ、総テ運輸工事成は防禦ノ為ニ従来公費ヲ使用スル慣習アルモノノミニ限リ之ヲ掲載セリ」と記載されていることから、福島県としての河川管理の基礎資料であることが分かる。

調査内容は多岐にわたり、水量に係わる実測、河口部の干満の概況、航路の改修、船舶の積載量、河岸ごとに扱う輸出入貨物の統計、舟行賃金、運輸業の起源とその盛衰などで



阿武隈川流域河川調 (明治・大正期の福島県庁文書F2392)

特に、「航路の概況」についての記載では、水量の少ない西白河と石川あたりの上流域では筏を使用し、中流域の岩瀬郡須賀川地内の釈迦堂川合流地点からは水量が増し通船が可能になるが、安積郡から伊具郡丸森河岸の間は、急流・激流の難所が連続し舵取りが難しいこと、河口までの下流域は緩流であるが夏季の低水位時は浅瀬が目立ち荷の積載量が少なくなるなど、地域ごとの河床の状況や周辺の地形の特徴を詳細に記している。

河川の実態調査は、本来、経済活動の様子を捉えるための内容となるが、そこに含まれる地理的な記載は、当時の阿武隈川流域を概観できる重要な史料である。(佐々木慎一)

アジア太平洋戦争下の回覧

今年は、アジア太平洋戦争が終結してから七十周年という節目の年にあたる。戦後六十周年の時と決定的に異なるのは、実際に戦争を経験した人がこの十年の間に激減し、戦争の記憶の風化が著しく進んだことである。...



鉄道も兵器です (湯ノ花区有文書280)

先づ戦力増強の資材輸送を... 戦時輸送協力せまう... 鉄道も兵器です... 左に掲げたものは、ポップ体で書

かれた「鉄道も兵器です」という隣組の回覧(湯ノ花区有文書二八〇)で、大政翼賛会福島県支部・福島県翼賛壮年団・鉄道省によって昭和十八年(一九四三)頃に作成されたイ

平成二七年度 行事予定

第三回九月六日(日)・第四回九月一九日(土) 【会場等】第一・二回が県文化セン

1. 展示公開

「花と温泉」 ーかおりと湯けむりの記憶ー ーふくしまステイションンキヤンペーン開催に合わせ、ふくしまの

【会期】「前期」平成二七年七月五日(日)まで、「後期」平成二七年七月一八日(土)〜九月二七日(日)

【解説会】平成二七年七月二五日・八月八日・九月一九日(各土曜日) 午後一時から一時間程度。

【新公開史料展】 【会期】平成二八年一月一六日(土)〜三月一三日(日)

※なお、一〇月〜一二月の間には、歴史や収蔵資料の理解を深めるためのパネル展等を行います。

2. 古文書講座 当館収蔵の長谷部家文書(県指定重要文化財)をテキストに用い、計

【日程】第一回平成二七年七月一八日(土)・第二回八月二日(日)・

【日程】第一回平成二七年七月一八日(土)・第二回八月二日(日)・

福島県史料情報 第42号 平成27年6月25日 編集・発行 公益財団法人 福島県文化振興財団 福島県歴史資料館 〒960-8116 福島市春日町5-54 TEL 024-534-9193 FAX 024-534-9195 URL http://www.history-archives.fks.ed.jp/ E-mail office@history-archives.fks.ed.jp